

周作人の前期の翻訳活動について

陳 洪 傑 李 愛 華

はじめに

周作人(1885-1967)の文学生涯の中で、翻訳活動が大きな比重を占めている。⁽¹⁾彼の文学活動は翻訳から始まり、翻訳で終わっていると言える。⁽²⁾彼の翻訳作品の内容などから、その翻訳活動をおおざっぱに二つの時期——前期と後期に分けることができる。前期は彼が南京江南水師学堂に入学した1901年から、五四新文学運動の高潮期である1923年前後とし、後期はその後の新文学運動の退潮期から彼の死去の1967年までとする。⁽³⁾周作人の翻訳作品の数と質から見て、前期は後期とは比べられない、しかし、彼の前期の翻訳活動の意義および新文化運動への影響は、はるかに後期を越えると思われる。本稿は、周作人の前期の翻訳活動を中心に、南京時期、日本留学時期、五四時期と、三つの時期に分けて、彼の前期の翻訳活動のいきさつを追いながらその輪郭に触れてみたい。

一、南京時期

周作人は1901年9月に故郷の紹興から南京に来て、江南水師学堂に入って、五年間の学生生活が始まった。その時から新しい思想や文学と接触し始めた。その頃は、維新派の訳著がもてはやされていた時期で、周作人も当時の数多くの知識青年と同じく嚴復(畿道)、林紓(琴南)、梁啓超(任公)らの翻訳し紹介した西欧の文芸や思想の影響を受けた。彼は後年にこう言っている。

……我们正苦枯寂,没有小说消遣的时候,翻译界正逐渐兴旺起来,严几道的《天演论》,林琴南的《茶花女》,梁任公的《十五小豪杰》,可以说是三派的代表。我那时的国文时间实际上便都用在看这些东西上面,而三者之中尤其是以林译的小说为最喜看;从《茶花女》起,至《黑太子南征

录》止,这期间所出的小说几乎没有一册不买来读过。

(……私たちが暇つぶしに読む小説がなくて、無味乾燥な日々を送っていた頃、翻訳界はちょうど盛んようになってきた。巖幾道の『天演論』、林琴南の『椿姫』、梁公任の『十五小豪傑』はそれぞれ三つの流派を代表している。その時の国語の時間のほとんどはこれらの読み物に費やされていたのである。そして三者の中では、林訳小説が一番好きだった。『椿姫』から『黒太子南征録』までその間に出版された小説はほとんど読まないものはなかった。)⁽⁴⁾

これから、周作人が梁啓超や林紓の訳著に夢中になっていたのがわかる。周作人は江南水師学堂に在学中、授業の余暇に新しい小説や新聞を愛読していた。その主なものは維新派梁啓超が創刊した『新民叢報』、『新小説』などであった。彼は、文学の面では林紓が翻訳した小説の影響を受けていたが、思想の面では梁啓超の改良思想の影響を強く受けていたと思われる。周作人が南京へ来る前には、祖父の影響もあって、数多くの旧小説を読んでいた。⁽⁵⁾しかし、南京に来てからは、新思想、新文学に接触したので、文学の興味はすでに旧小説から新小説へと変わってきたのである。

林紓らの翻訳した外国小説をたくさん読んでいたので、周作人はたいへん外国文学に興味を持つようになっていた。それと同時に自分でも外国文学を翻訳してみたいという考えも芽生えたのである。それを手伝っているのは、江南水師学堂にいた五年間、英語をマスターしたことであった。

南京に来て四年目の1904年に、周作人は外国文学の翻訳の試みをした。最初の作品は、英訳の『アラビアンナイト』をもとに「アリババと四十人の盗賊」を翻訳し『侠女奴』と改題した作品であった。のちに雑誌『女子世界』に連載して署名は萍雲女士であった。翌年の1905年6月に単行本として出版した。二番目の作品は、アメリカのアラン・ポーの『黄金虫』を訳出して『玉虫縁』と改題した作品で、署名は碧羅女士であった。『玉虫縁』は『侠女奴』と同じく1905年に出版された。『侠女奴』は『玉虫縁』より

先に訳出したが、雑誌に連載していたため単行本として出版されたのは『玉虫縁』の一ヶ月の後だった。

周作人のこの二つの訳著は作品の題材から見ても、林紓の影響を受けたのが明らかであった。二つとも義侠心のある盗賊の伝奇的な紋きり型のものであった。その頃、林紓らが翻訳した『説部叢書』が、文学翻訳界で風靡していた時期であった。初めて翻訳の試みをした周作人がその影響を受けたのも考えられることである。のちになって、周作人はこう言っている。

最初读严几道、林琴南的译书,觉得以诸子之文写夷人的话的办法非常正当,便竭力地学他。虽然因为不懂‘义法’的奥妙,固然学得不象,但自己却觉得不很背于移译的正宗了。

(最初嚴幾道、林琴南の訳本を読んだ時、諸子(古文)で外国語の言葉を書く方法はきわめて正当だと思い、精一杯にまねをした。「義法」の奥の深が分からないので、うまくまねできなかったが、自分としては翻訳の本筋に背いていないと思った。)⁽⁶⁾

『侠女奴』と『玉虫縁』という周作人の試みた翻訳作品は、順調に出版された。確かにまねの痕跡があったが、しかし、これは初めての翻訳で、周作人にとって間違いなく大きな収穫であった。彼のその後の翻訳創作にとって自信を固めただけでなく、礎ともなったのである。この二つの作品は、まだ明確な目的もなく、ただ個人的趣味から翻訳したものだが、のちに彼が日本に留学し、東京で魯迅と共訳したものは「文芸で国民の精神を変える」という明確な目的を持ったものだと言えるだろう。

二、日本留学時期

1906年夏、周作人は清朝の留学生として、結婚のため一時帰国していた魯迅に伴われて来日した。東京で、兄魯迅と共に生活し、共に文芸活動をするようになった。帰国までの六年間の留学生活は、周作人にとってどんな思い出になったのか、彼が晩年に書いた『知堂回想録』にこう回想

している。

老实说,我在东京的这几年留学生活,是过得颇为愉快的,既然没有遇见公寓老板或警察的欺辱,或有更大的国际事件,如鲁迅所碰到的日俄战争中杀中国侦探的刺激,而最初的几年差不多对外交涉都是由鲁迅替我代办的,所以更是平稳无事。这是我对于日本生活所以印象很好的理由了。

(本当のところ、私の東京での数年間の留学生活は頗る愉快なものだった。アパートの大家さん或いは警察に馬鹿にされたこともなければ、また大きい国際事件に遭ったこともない。魯迅が体験したような、日露戦争中、中国人スパイが殺されるというショックを受けたことも無い。そして、最初の数年間、対外交渉はほとんど魯迅が替わりにしてくれたので、尚更平穩無事だった。これが私が日本での生活に対して良い印象が残った理由である。)(『知堂回想録』220頁)

1906年から1909年まで、東京で魯迅と一緒にいた三年間、周作人が生活の面では大いに魯迅の世話になったことは考えられる。一緒に生活していたため、思想や精神の面でもかなり魯迅の影響を受けていたと思われる。この三年間は「周氏兄弟」の生涯の中で、最も緊密に協力し、力を合わせた時期だったと言える。彼らは共に外国文学作品を翻訳したり、共に雑誌を発刊しようとしていたりしていた。これらを以て、彼らの「国民の精神を変える」という目的を実現させたかったのである。

東京に来てから二年目の1907年に周作人が魯迅とイギリスのハッガート及びアンドル・ランダ共著の小説『世界の欲望』(The World's Desire)を翻訳し、『紅星佚史』と改題した。署名は周連であった。この本はギリシア風の神話小説であった。周作人にとって『紅星佚史』は、『俠女奴』と『玉虫縁』に続いて三篇目の訳著であったが、林紓らの影響がまだ相当残っていた。後に周作人は「習俗と神話」においてこう述べている。

那时哈葛德的神怪冒险各小说经候官林氏译出,风行一时,我的选择也就逃不出这个范围。

(その頃ハッガートが書いた神怪、冒険の小説は侯官の林氏(琴南)によって翻訳され、天下を風靡したから、私の選択もこの範囲から逃げることはできなかった。)(「習俗と神話」『夜読抄』)⁽⁷⁾

1907年11月に魯迅と共訳した、この約10万字の訳著は『説部叢書』の神怪小説として、上海の商務印書館から出版された。しかし、注目に値するのは、『紅星佚史』の序言から周作人の啓蒙主義の文芸観と翻訳の理念をうかがうことができるということである。⁽⁸⁾彼は西洋文学を紹介し、翻訳するには、西洋の思想や文化を如実に紹介しなければならないと主張した。彼は自分の訳著を人々が西洋の進歩的な思想や文化を理解する一助とし、「情を移し、社会を改革する」という目的を実現させようとしたのである。

この訳著は「神怪小説」の範囲をのがれられなかったが、注意すべきことは、この作品から翻訳の方法として「直訳」という新しい翻訳の方法を初めて用いたということである。そして原書に関する外国文学の知識を紹介するのに大いに力を入れていたのである。何といたってもたゆまない努力が報いられ、二人で初めて共訳した『紅星佚史』は順調に出版されたのである。これは彼らにとっては、いうまでもなく大きな励みになり、同時に経済的にも多少プラスになった。

『紅星佚史』を訳出したあと周作人が魯迅とロシアのアレクセイ・トルストイの長編歴史小説『銀公爵』を訳した。のちに『勁草』と改題した。二人でこの作品を翻訳していた様子を、後に周作人はこう回想している。

阴冷的冬天,在中越馆的空洞的大房间里,我专管翻译起草,鲁迅修改着正,一点都不感到困乏或是寒冷,只是很有兴趣的说说笑笑,谈论里边的故事。

(寒い冬のあいだ、中越館のがらんとした大きな部屋で、私が翻訳、起草し、魯迅が訂正、抄録して、眠気も、疲れも、或いは寒さもぜんぜん感じなかった。(ふたりは)楽しくしゃべったり、笑ったり、その中の物語について話し合ったりしていた。)(『知堂回想録』249頁)

このことから、周作人と魯迅二人の仲むつまじさと苦楽を共にした緊密な協力ぶりが想像できるだろう。ここで、もう一つ注目しなければならないのは、翻訳作品の題材の転換と言うことである。彼の作品の取材は、すでに「神怪小説」の範囲を乗り越えて、「ちょうど専制政治と革命が対抗している時」のロシア文学へ移ったことである。これまでのはっきりした目的もなく、ただ個人の趣味から翻訳の題材を選択したのと違って、しだいに「文芸で国民の精神を変えろ」という目的がはっきりしてきたのである。これは周作人の翻訳の経歴上、大きな転換期と言えるであろう。

しかし、二人で寒い冬の間にやっと訳し終えた『勁草』の出版は失敗してしまった。完訳した原稿を書店(商務印書館)に郵送したが、しばらくして書店からすでに同一の本が訳されて印刷中であるからと言う返事があって、原稿が返却されてきた。それでも彼らは気を落とさず、すぐに次の仕事に着手した。

その後、周作人は単独で三つの中編小説を翻訳した。それはハンガリーのヨーカイ・モルの『匈奴奇士録』、『黄薔薇』とポーランドのシェンキヴィッチの『炭画』であった。三篇とも東欧弱小民族の文学から取材した作品で、作者のヨーカイ・モルとシェンキヴィッチは革命作家であった。

『匈奴奇士録』は1908年6月に商務印書館から出版され、署名は周作人であった。『炭画』と『黄薔薇』は運が悪くて、なかなか出版できなかった。周作人は帰国後の1913年に『炭画』の原稿を商務印書館に送ったが「行文が晦渋で、古書を読むがごとく、通俗でないから」⁽⁹⁾という理由で、返却された。のちにその原稿を中華書局に送ったが、やはり返却された。けっきょく『炭画』は1914年4月に北京の文明書局から出版され、署名は周作人であった。『黄薔薇』の出版はもっと遅れた。⁽¹⁰⁾

『匈奴奇士録』が出版された翌年の1909年に、友人の蔣抑卮の援助のも

とで周作人と魯迅が共訳した『域外小説集』を二冊刊行した。この二冊には十六篇の短篇小説が含まれていた。その中にイギリス、アメリカ、フランス三ヶ国の作品が一篇ずつで、あとは全部東欧弱小民族及びロシアの作品であった。

周作人と魯迅はなぜこのような作品を選択したかと言うと、彼らの当時の思想と大きくかかわっていたと思われる。周作人は『現代小説訳叢』の中でこう言っている。

……很受了本国的革命思想的冲激；我们现在虽然忘却了民报上的文章，但那种同情于“被侮辱与损害”的人与民族的心情，却已经沁进精神里去：我们当时希望波兰及东欧诸小国的复兴，实在不下于章先生（太炎——筆者注）的期望印度。直到现在，这种影响还很深，…因此历来所译的便大半是偏僻国度的作品。

（……本国の革命思想を強く受けた。私たちは今『民報』に載った文章を忘れていたが、あの「被侮辱及び被迫害」の人々とその民族に同情する心情はすでに精神に沁みこんでいる。私たちは当時ポーランド及び東欧諸小国の復興するのを望み、その気持ちは章先生（太炎）のインドへの期待とかわらなかった。今になってもその影響はまだ深い。……そのためこれまで訳した作品のほとんどは辺鄙な国の作品であった。）（『現代小説訳叢』序）⁽¹¹⁾

それについて飯倉照平氏が彼の論文においてこう述べている。

当時彼らは東京亡命中の碩学、章太炎に師事しており、その影響もあって熱心な民族革命の信徒であった。そのため自然にその興味は弱小民族、被圧迫民族の文学に向けられ、この二冊においても東欧スラブ系を偏重し、弱小民族を偏重したのである。この傾向はそのあと永く二人の作品を支配している。⁽¹²⁾

確かに飯倉照平氏に指摘されたように、新文学運動が発生後の1923年

前後になっても、その傾向がまだ続いていることが『現代小説訳叢』などの作品からも分かる。しかし、『域外小説集』は出版したにもかかわらず、売行きがぜんぜんなかった。彼らの「当初の計画」は

是筹办了连印两册的资本,待到卖回了本钱,再印第三第四、以至第X册的。如此继续下去,积少成多,也可以约略介绍了各国名家的著作了。

(二冊刊行する資金を工面した。本を売って元が戻ったら、また第三冊、第四冊ないし第X冊を刊行する。このように継続していけば、少しずつでもためればたくさんになる。それで、およそ各国の有名な作家の作品を紹介することができる。)(『域外小説集』新版序言)⁽¹³⁾

しかし、資金が続かないので、彼らの計画はついに実現できなかったのである。『域外小説集』は二冊きりで挫折してしまった。しかし出版した二冊の『域外小説集』は、いわば真の意義で、はじめて系統的に外国新文学を翻訳紹介する著作であるといえるだろう。その中国の翻訳文学史における地位も大いに評価しなければならない。1920年3月に『域外小説集』が再版され、外国新文学を翻訳紹介する先駆的な価値が改めて評価されたのである。その年の8月に魯迅が帰国した。このような状況の下でも、周作人の外国新文学を翻訳、紹介する決意は動揺しなかった。彼はひきつづき二十一篇の短篇小説を完訳した。それらの未刊の訳著は新文学運動発生後に相次いで出版された。

『域外小説集』を論ずるには雑誌『新生』を論じなければならない。魯迅が日本に留学した頃、東京にいくつかの留学生によって刊行された雑誌があった。魯迅もそれに論文や訳著を発表していたが、自分たちも文芸雑誌を刊行したかった。『新生』を刊行する計画は、魯迅が1906年春、仙台の医学校を中退してから考え始めたことであった。⁽¹⁴⁾雑誌の名称も中国から東京へ戻る前にすでに決まっていたのだ。⁽¹⁵⁾ところが、準備する段階で、「先に文字担当の人に逃げられ、それから資本にも逃げられた。一文なしの三人だけが残った。」⁽¹⁶⁾雑誌『新生』はとうとう世に問わなかった。彼らの文芸雑誌を発刊し「外国新文学を紹介する」という計画は途

中で失敗してしまった。しかし、残った三人は(許寿裳もいた)まったく気落ちしなかった。相次いで、雑誌『河南』に論文を発表した。これで「当初の計画」は部分的に実現したのである。周作人が後年『知堂回想録』にこう言っている。

鲁迅計画刊行文艺杂志,没有能成功;但在后来这几年里,得到《河南》发表理论,印行《域外小说集》,登载翻译作品,也就无形中得了替代,即前者可以算作新生的甲编,专载评论,后者乃是刊载译文的乙编吧。

(鲁迅は文芸雑誌の刊行を企画していたが、成功しなかった。しかし、その後の何年間の間、『河南』に論文を発表したり、『域外小説集』を刊行したり、翻訳作品を載せたりして、実質的に替わることができた。すなわち前者は『新生』の甲編で、もっぱら評論を載せ、後者は訳文を載せる乙編なのだろう。)(『知堂回想録』254頁)

三、五四時期

1911年9月に、鲁迅より二年ほど遅れて周作人は六年間の日本留学生生活を終え、日本人妻の羽太信子を連れて故郷の紹興に帰った。帰国後の周作人は、1917年4月に北京へ出るまでの六年間、浙江省教育司の省視学になったり、紹興県の教育学会の会長を担任したり、中学校の教員をしたりして、まとまった翻訳の仕事に手をつけなかった。この時期は彼にとって、「蟄伏期」或いはエネルギーを蓄える時期だったと言えるかもしれない。

1917年4月に周作人が北京に来て、まず北京大学付属国史編纂処に籍を置き、半年後に北京大学文科の中国文学系教授に転任した。1918年から数年間は周作人が集中的に外国新文学を翻訳していた時期であった。1920年に『点滴』が北京大学の出版部から出版された。署名は周作人であった。『点滴』には、短篇小説二十一篇、評論三篇、序文一篇が含まれた。1922年に兄の鲁迅と弟の周健人と三人が共訳した『現代小説訳叢』が商務印書館から出版された。中には周作人訳十八篇、鲁迅訳九篇、周健人訳三篇が含まれた。署名は周作人であった。また1920年には『域外小説集』の

合訂版刊行にあたって、周作人訳十三篇、魯迅訳三篇に新たに周作人の未刊の文語訳二十一篇が加えられた。『点滴』と『現代小説訳叢』のこの二つの作品集は東京時代の周氏兄弟の翻訳作業の続きで、『域外小説集』の続編であると言ってよいだろう。

以上、周作人の翻訳活動を追いながら、三つの時期に分けて、みてきた。周作人のこの三つの時期の文学活動はその時期の思想活動と大きくかかわっていたと思われる。

南京時期は、周作人の新しい時代への接触し、新しい文化や思想を吸収した時期であった。その頃彼は思想の面では維新派の改良主義の影響を受けており、文学の面では林訳の小説の影響を受けていた。江南水師学堂にいた時に身につけた英語を生かして、『俠女奴』と『玉虫縁』を訳出した。南京へ来るまでは「尊王攘夷の思想を抱(い)」⁽¹⁷⁾ていた。南京へ来てからは「『新民叢報』、『民報』、『新広東』のたぐいを読んで、一変して排満(及び復古)となり…」⁽¹⁸⁾思想的には初歩的な民族主義になってきた。

日本留学時期は、兄魯迅と共に生活し、共に外国新文学を翻訳したり、文芸雑誌を刊行しようとしたりして、緊密に協力した時期であった。周作人は魯迅との生活もあって、そして章太炎の影響も受けて、思想的にはすでに維新派の影響を抜け出し、民族主義へと変わっていた。(南京へ来てから)「十年もの長いあいだ民族主義であることを堅持しつづけたが、民国元年になってようやく軟化した。」⁽¹⁹⁾この時期、周作人が魯迅と長編小説『紅星佚史』と『勁草』を共訳し、一人で中篇の『匈奴奇士録』、『炭画』と『黄薔薇』を訳出した。そして魯迅と『域外小説集』を刊行した。『勁草』をはじめに、小説の題材は神怪小説の範囲を飛び越えて、ロシア及び東欧弱小民族文学へ変わっていった。とくに『域外小説集』では、「東欧スラブ系を偏重し、弱小民族を偏重した」。日本留学時期は周作人が「民族」を強く意識した時期なのである。

五四時期は、周作人の生涯の中で最も活躍した時期でもあった。魯迅と共に新文学運動の旗手として、最前線に活躍していた。周氏兄弟の名は当時の文壇にはせていた。この時期、周作人は『人的文学』(1918)、『平民文学』(1919)、『思想革命』(1919)などの有名な論文を書いたほか、数多くの外国新文学を翻訳した。これらは『点滴』と『現代小説訳叢』及びの

ちに出版した『現代日本小説集』などに収められた。

周作人は五四時期、思想上にも変化が起きた。「民族主義を堅持しつつ」も、民主主義へ変わりつつあった。この変化は彼の訳した作品にも反映していた。とくに『点滴』には、弱小民族文学ばかりでなく、南アフリカ、新ギリシア、デンマーク、スウェーデンなどの国の作品も含まれていた。彼の作品の範囲も広がったばかりでなく、作品の題材も多種多様になっていった。これまで「民族」を強く強調していたが、この時期から「人類」をより強調するようになっていったのである。周作人は『点滴』の序にこう言っている。

这些并非同派的小说之间,却仍有一种共同的精神——这便是人道主义的思想。无论乐观或是悲观,他们对人类总取一种真挚的态度。(中略)这大同小异的人道主义的文学,正是真正的理想的文学。

(これらの決して同じ流派ではない小説の間にもある種の共同の精神がある。——それはすなわち人道主義の思想である。楽観的或いは悲観的であっても、彼らは人生に対してある種の真摯な態度をとっている。(中略)この大同小異の人道主義の文学がまさに真の理想の文学なのである。)(20)

『点滴』は、周作人の「弱小民族文学」から「人道主義文学」へ転換してきた、代表的な作品だと言えるのであろう。作品の内容に変化が起きていたが、『点滴』では、彼の積極的に外国新文学を紹介し、翻訳する情熱がまだうかがえるのである。

結び

1923年前後から、彼の外国新文学を紹介し、翻訳する情熱はかなり衰えてきた。その後の彼の翻訳作品は「新文学」から「旧文学」へ移っていった。再び本来自分の好んでいた趣味的な文学に帰るのである。これは、本稿が周作人の五四時期を彼の翻訳の前期の範囲にした理由の一つである。

〈注〉

(1) 周作人の生涯の出版物は、著作40種、古典籍の収録、校訂2種、訳著34種(そのうち、他人と共訳11種)。(張菊香・張鉄榮編『周作人年譜』939-945頁 天津人民出版社 2000年、による)

(2) 1904年の『俠女奴』から1967の『平家物語』の第7巻を脱稿まで。『平家物語』全11巻、あとの4巻を、申非が訳し終えた。1984年6月に人民文学出版社から出版し、署名周啓明・申非訳。(『周作人年譜』、による)

(3) 周作人は1941年に書いた『『書房の一角』原序』にこう言っている。

「私が文章を書くことは光緒乙巳年(1905年)に始まり、現在ですでに三十六年になる。この間は三つに分けることができる。一つ目は民国十年頃までで外国の作品を多く訳した。」これも、周作人の前期の翻訳を1923年前後とする根拠の一つになるのではないかと思う。

1923年前後を境目に、周作人の前期の作品は「主義」のためのもので、すなわち、「民族主義」、「人道主義」のものはほとんどであった。それに対して、後期の訳著とくに50年代からの作品は「趣味」のためのものが多かったと言える。本稿を参照。

(4) 「我学国文的經驗」張菊香・張鉄榮編『周作人研究資料』所収 99頁 天津人民出版社 1986年

(5) 註(4)に同じ。96-98頁。

(6) 「我的復古的經驗」『雨天的書』岳麓書社 1987年

(7) 「習俗と神話」『夜讀抄』上海北新書局 1934年

(8) その序言にはこのような一節がある。

世之现为文辞者,实不外学与文二事。学以益智,文以移情,能移人情,文责以尽,他有所译,客而已,而说部者文之属也,读泰西之书、当并函泰西之意,以古目观新制,适自蔽耳。(『『紅星佚史』序』『周作人研究資料』所収 304頁)

(9) 『知堂回想録上・下』278頁 河北教育出版社 2002年

(10) その出版のいきさつについて周作人はこう言っている。

在这之后,我又翻译了一本《黄蔷薇》,这乃是匈牙利小说家育凯摩耳所著,也是中篇小说,原本很长,经英译者节译成了中篇,一总只有三万字左右,因为后来卖稿

給商务印书馆得了六十元,但那时已去译出的十年之后了。

その後、私は『黄薔薇』を訳した。それはハンバリーの小説家のヨーカイ・モルの作品で中篇小説だった。原書は長かったが英訳者によって、中編に縮約された。約3万字。のちに(完訳した)原稿を商務印書館に売って60元得たが、時はすでに訳し終えたときの十年のあとだったのだ。(『知堂回想録上・下』279頁)

- (11)『『現代小説訳叢』序』『周作人研究資料』所収 304頁
- (12)飯倉照平「初期の周作人についてのノートⅠ・Ⅱ」『研究』第37号、第40号
神戸大学文学会
- (13)『『域外小説集』新版序』『知堂回想録上・下』271頁
- (14)『知堂回想録上・下』229頁
- (15)『周作人年譜』71頁
- (16)『『呐喊』自序』
- (17)、(18)、(19)「元旦試筆」『雨天的書』岳麓書社 1987
- (20)『『点滴』序』『周作人研究資料』所収 303頁

〈 参考文献 〉

- 周作人『知堂回想録上・下』河北教育出版社 2002年
- 周作人『自己的園地』・『雨天的書』・『澤瀉集』 岳麓書社 1987年
- 尾坂徳司『中国新文学運動史』法政大学出版局 1971年
- 『周作人年譜』(張菊香・張鉄榮編) 天津人民出版社 2000年
- 『周作人研究資料』(張菊香・張鉄榮編)天津人民出版社 1986年
- 錢理群『周作人論』上海人民出版社 1991年
- 李景彬『周作人評析』陝西人民出版社 1986年
- 劉岸偉『東洋人の悲哀——周作人と日本』 河出書房新社 1991年
- 木山英雄『北京苦住庵記:日中戦争時代の周作人』筑摩書房 1978年
- 木山英雄『周作人「対日協力」の顛末:補注「北京苦住庵記」ならびに後日編』岩波書店 2004
- 松枝茂夫「周作人——伝記的素描——」『中国文学』第60号所収 昭和15年
- 飯倉照平「魯迅・周作人兄弟と現代文学」『中国文化史——近代化と伝統』研文出版 1981年

飯倉照平「初期の周作人についてのノートⅠ・Ⅱ」『研究』第37号、第40号 神戸大学文学会

細谷草子「五・四新文学の理念と白樺派の人道主義」『野草』第6号所収

村田俊裕「周作人の小品文——その〈民族的自己批評〉文を中心として——」

『中国関係論説資料』19第2分冊下所収